

翻刻『日記 從四位下 賀茂県主氏凭』（凭久日記）

自享保六年辛丑正月朔日

至 同年 三月朔日

「解題」

梅辻諱

この本は江戸時代中期の享保五年から六年にかけて、上賀茂神社の社司と氏人の間に発生した「五家騒動」と呼ばれる紛争の結果、社司のうち五家の当主や息子が違勅の罪に問われて遠島の処分となり、家族も追放となった事件を個人的な日記の形で書き残したものである。筆者はこの騒動の結果、梅辻家を継承することとなった安曇川氏凭（後に凭久と改名）である。この日記は単なる個人的なメモではなく、明らかに後世に「真相を伝えようとする意図を持って書かれており、その後、本人が書き加えたり、度々書き写されている。梅辻家に現存のものは安永二年に梅辻家の当主 安久が書き写したものである。

この日記は享保六年一月一日から書き始め、三月一日の神社における新体制の始まりで終わっているが、ここで翻刻を試みたのは一月二十九日から三月一日までの一ヶ月間の部分である。この期間こそ「五家騒動」の核心の部分であり、賀茂県主族にとっては正に空前絶後の受難の時期に相当する。

主な内容は次の通りである。享保五年六月十二日に、社司のうち鳥居大路、松下、梅辻、森、富野の五家はそれぞれ違勅の罪で閉門となったが、翌年の二月十五日には京都町奉行所から出頭命令が来て、五家の当主にそれぞれ遠島の判決が申し渡された。家族や従兄弟にいたるまで追放という厳しい処分であった。続いて奉行所から臨検使が来て、家財道具類や古文書など悉く没収とのことで封印がなされた。奉行所が特に留意したのは松下家に伝わる後鳥羽上皇の肖像画と御宸筆であった。一時行方不明とのことで厳しく探索され、結局幕府により没収された。続いて十七日には賀茂伝奏から追放された五家を継ぐのにふさわしい人物を古い親戚の中から選んで推挙せよとの命令が伝えられた。老若一同の合議の結果、候補者を推挙することになったが、再び専横な振る舞いと不祥事がないように彼らに誓約書を提出させることとした。一方、神主の林重統は自分の第二人と息子一人を五家の継承者にすることを願ひ、一族とは別に願書を作って提出した。廿一日に賀茂伝奏より申し渡しがあり、鳥居大路家を山本盛平、松下家を梅辻督久、森家を西池篤久、梅辻家を安曇川氏凭、富野家を岡本季隆が継ぐことになった。廿四日にはそれぞれに新しい役職が勅許により発令された。そして、それぞれは拝賀の式を神社で行った。季隆には直ちに葵使の大役が申しつけられた。（彼の葵使記録は先年発見されて、重要文化財の一つに指定されている。）

凭久日記二

一月廿九日 辛卯 晴嵐或霰或雪下

一主税助保富参詣ニ付、去ル廿一日寄合之源ヲ尋ニ、保富モ

当番ニ而雖不出座荒増被聞伝由也、先十五歳元服之

節被用袍己下ノ具於ニ手被調置ニ決ス、次佐渡守山頭

息一度供僧ニ可成由ニ而、未雖無得度氏人ニ可成事成間敷

決スト云々、同人咄ニ云、京都町奉行山口安房守殿旧冬関東へ

下向ノ処、役儀御免ニ而遠慮ニハ不及由ト云々、并京都所司代

松平伊賀守殿来二月二十一日頃ニ京都御発足ニ而関東へ御下

向ト云々

又曰ク、上使畠山下総守殿昨二十八日御参門ト云々

一會所清遠より火之用心ノ口触一紙来、日参和直ニ返書ヲ遣ス

二月大朔日 壬辰 霽 嵐

一日参長松大夫與頭代季嘉参向、今朝六役ノ闕ヲ尋

沙汰人千代菊大夫久尾 日向守状直 函書允方直 雜掌

讚岐守保普 西市正方俊 拘書左兵衛大尉長氏被

當ト云々

三日 甲午 晴天

一善頭へ書状 日参季隆代詮季へ伝語ス、来ル七日

弥交替之儀申遣ス、氏便ニ三番ノ精進頭清言より

書状到来、成就院へノ書状可届頼、未刻詮季奥ノ

宮へ参詣ノ節被届様ニ申遣ス

一 為初午ノ祝儀出惣市方夕飯被振舞

四日 乙未 快霽日色温和鳥声吉春

一日参保寄代氏証参勤物語ニ云

一昨日堤御伝奏惣代左ニ来、當年御祭近衛使

花園右中将殿被仰出由被仰渡

一昨日堤へ身投之者有之由也、三十斗ノ下男ト云々

一今日御祭下行米御裏判出ル由、惣代二条へ被参由ト云々

五日 丙申 曇晴不定午刻微雨下

一當日予雖當日参詰番衆次座菊顯代季嘉参向

物語云、此間社中寄連之芝出入ニ付、昨日立合之寄合

有之ト云々

此事ハ去年鞍馬寺開帳之節彼ノ芝ニ賀茂領神事

芝ト云杭ヲ被為打ニ付、鞍馬寺より非賀茂領由ヲ遣ス

二日 葵己 霽

ニ付而、自去年出入ニ成、近頃外垣之沙汰ニ成也

一當日予當日參衆端與參社、午刻下向

一相役善頭より此間之返簡來、弥明後七日ニ交替ノ由申來

返事右不及返簡

一前相役清言へ一昨日之返事季嘉へ伝語ス

六日 丁酉 自昨夕雪下積三寸陰云々

一日參季嘉代菊頭參向物語ニ云、此間神中ノ芝ノ

出入ノ事ヲ昨日雖記非其儀、今日菊頭被咄者市原ノ

出入ノ事、近年市原ト神山ノ出入有之処、去年

漸相濟也、然ル処ニ兩方端中ニ土盤絵圖出來ス

其入用等之事ヲ高ニ割付可出由、公儀へ訴ニ付惣代

呼ニ來ト云々

七日 戌戌 晴天

一日參次分八大夫善顯參向、直ニ交替、仍而貴布禰より退下

一金千代大夫壽頭精進頭解、行卯大夫菖頭補之

壽頭從弟故兼定ニ男虎藤大夫兼敬去ル二日和州

於郡山卒去ノ申來ト云々時七十七歳

一故右衛門佐季有女昨夕死去ト云々

一今日六役相極、仍而老若ノ寄合有之、沙汰人備前守氏滿

隱岐守保普、丹波守兼成、雜掌大膳権亮清親、内膳正

高頭、執筆志摩守保堅、皆去年之返也、沙汰人ノ申雅樂助

清遠斷相立而兼成加ル而已也

一沙汰人会所割 二月氏滿、三月兼成、四月保普ト云々

一氏足方より人來、予先日より手紙來而有之ヲ披見ス

今日ハ慈母公へ斗御狀ヲ上ル、予方より先日之書狀今日ノ

御文一度ニ返簡ヲ遣ス、來ル十一日西中手可出座由也

八日 己亥 快晴

一來十一日、勘定ノ席ニ氏足西中手へ可出座由ニ付、樽代

祝儀物ノ為相談、辰刻過向氏足亭、氏會より手紙

彼亭ニ有之、予未退下ヲ不知故ニ木船ニ可上由ニ而一封

帛披見ノ処、十一日氏足出席ノ事也、直ニ氏會亭へ行

対談、樽代今日ニ而も西中手ノ藏奉行ノ内與頭亭へ

可遣ス申入、持參物ハきせる五本ニ極、其内ニ氏足亭より

修学寺氏足方へ人ヲ遣ス由有之ニ付手紙ヲ遣ス、是又

十一日ノ事也、帰路與頭亭ニ而與頭へ対談シ、樽代米ノ

事申入、樽代ハ判卷斗、及晩景氏足返事來ル

一右之席、普頭朋氏兩人亭へ見舞

一午上刻長氏同道ニ而車坂ノ西ノ谷ヒノ谷へ蔭堂取りニ行

申刻帰家、出足ノ時分於長氏亭被催一献肴五六茄子ノ

塩漬等也

一入夜西手ノ年行事、向規保亭、氏足出座ノ事申入
一今日立会有之

九日 庚子 曇晴不定風有之

一如例貫布禰御祈禱、御師精進頭沙汰人以上廿一人
参向、相役善顯へ手紙遣ス、御師長氏三伝語ス
沙汰人会所割之事申遣ス、返答規保ニ来、明日依丑
精進頭五人者一宿之由也

十日 辛丑 快晴後戌刻雨下

一御祈禱無之
一規保入来、明日勘定延之旨告
一午刻向清茂亭、他行之間不能対談、夫より朋氏亭へ
見舞、同半刻帰宅

十一日 壬寅 曇晴不定時々細雨下

一氏足入来、去ル朔日、普明院官八十八之御賀之節昆布
三十本予指上候ニ付御挨拶ヲ被為遊被下、其席
法皇素襖御所御歌拜見記シテ左

院御製

山に住その仙人の千年をもやすくそふへきつきぬ齡は
禁裏御所より被遣召歌

青柳のみどりの糸をくり返しいくらばかりの春をへぬらん

尊照親王 一乘院宮

祝ふより猶行末の千代をみん八十の後の八重霞む春
拝領之銀子慈母へ為祝分進ス、昼飯後退出

十二日 癸卯 晴時々雪雹降

一長氏同動ニ而小谷ノ廟へ参、慈父先考先始尽拜尋而
下向路上ノ岸ニ而散法門院宗子當社御参詣ニ参逢
一氏足入来、昼飯後退出
一規保入来、先月廿六日燃灯祭参勤ノ輩約束故
持参記テ左

権祝闕代官季賢、片岡祝闕代官保寅、新宮祝清可代
柱清、大田祝季張代季山、若宮祝季品、奈良祝旨顯
澤田祝昌幸、氏神祝季門、社務代季宝、陰陽不参
各浄衣指貫也

社事之次第荒増記テ左

権祝以下祝方斗参勤也、先社頭ニ参集ス、揃次第
日供門より出社館、於此所燃灯草ヲ備ル事有之
其後小松ヲ引而帰ル、大岩ノ上ノ橋ヲ渡、自ニノ神居経

玉橋、各欄宜方ノ廊下ニ参着ス、次燃灯草ヲ奉獻
次撰社不残彼草ヲ奉獻スト云々、尚重而委ク可記入
一 去年水戸代会より重陽迄参勤之書付是又為約束
規保へ遣ス

一 入夜向清茂亭、対談之後、五家之輩近日之内

公儀より何とかの御沙汰可有ニ付、予も鳥居大路家へ

出向申答ニて間内澄部ノ由、則一帳披見、五家之内

鳥居大路家ノ分書付帰記テ左

鳥居大路家役人宿 宋女 兼田 出向人数 大炊助

季門、縫殿助保言、石見介舎頭、若衆より大和保万

内記氏凭

覚帳之条々

一 書物入役人封付之長櫃一棹有之事

去年六月ニ鳥居大路家へ参衆

山口安房守殿組

一 与力 真野源之丞

一 同心

田中幸介

一 同 三光才右衛門

此節評議所ニ詰ル衆中老若衆より

清茂、田直、似頭、氏基、清連等也

十三日 甲辰 快晴

一 氏足今日木船へ参詣ス、下向之節夕飯振舞

一 貴布禰惣市、故式部大輔女今日被出ニ付此方へ入来

催一献、且内蔵頭藏顯男三人共名字ノ事ヲ被頼ニ付

去年十一月廿二日尽ク考而遣ス、仍而為礼彼妾方より一樽ヲ

贈、惣市口入衆一樽ヲ被持参也、名字ノ事

一 男亀介大夫美頭、二男左大夫勝頭、三男牛千代大夫央頭

右之通擇遣ス

十四日 乙己 快霽

一 普明院宮様より先日為御返昆布代銀壹包并餅二ツ、尾崎

主馬書状添拝領、返事相応之儀申上ル

一 沙汰人讀岐守保普入来、木船詰番所ノ鎖鍵ヲ持参也

一 他行之間、氏足今日帰ルニ付、為暇乞入来由也

一 同間、氏商入来由也

一 聖廟へ参長氏同道也、帰路遺経堂へ寄、夕場帰家

十五日 丙午 快晴

一 清連入来、今朝惣代ヲ二条より呼ニ来候由ヲ告、告構所へ

可参由ヲ被申

一 直方入来、同前

一 巳上刻向構所、今朝武者より来状貳返写帰、則記左

上賀茂役者貳人

早々御役所へ只今参ル様ニ

随分はやく被申遣可被成候

公事方より被渡候以上

二月十五日 沢与右衛門

五十嵐様

返答

上賀茂役者貳人

右只今早々御役所へ参上仕候旨

奉承知候以上

二月十五日 上賀茂役者

五十嵐市郎兵衛殿

右返答之後、因幡守太顯、内膳正亮顯兩人出京、其後

又一通来

覚

森飛驒

富野治部

松下民部

梅辻備後

鳥居大路左京

森式部

富野養子浄久

右之面々今日九ツ過同道、肥後守殿御役所へ御出可有之候以上

真野八郎兵衛 印

二月十五日 熊倉市大夫 印

源谷重左衛門 印

上賀茂

一社惣代

右之面々今日九ツ過同道仕、肥後守様御役所へ可罷出之旨奉畏候以上

二月十五日 上賀茂

一社惣代

一右返答之後、伯耆守季郷、大藏大輔保記二条へ被出

右五家之者共公儀より召連ニ被遣被下候様ニ願候也

然共、願不立、何も召連可出由也

一午刻五家ノ被官ヲ評議所へ呼寄、今日公儀より召

来候間、其用意可有由ヲ先申遣、其後沙汰人

兼成保普兩人五家へ尽被向、御召ノ由ヲ被申入

尤乗物ハ社中ニ而用意有之間、左様ニ可御心得由被申入也

一同刻一社惣代因幡守太顯、大膳権亮清親、五家ノ輩ヲ

召連、諏訪肥後守殿御屋敷へ被出、席老若より一家へ

兩人ツツ付添而被送届、尤歩其人数

主税頭氏連、雅楽助寄顯兩人ハ森飛驒連久

同式部淨久

播磨守季品、河内守清先兩人ハ富野治部致久、内藏桓久

隼人正聖頭、大藏大輔保記兩人ハ松下民部常久

越後守季湯、左馬助可頭兩人ハ梅辻備後郡久

石見介舍頭、下野守氏曉兩人ハ鳥居大路左京佐平

岡本隼人保善、岡本鞆負矩保氏兩人ハ二条ノ中宿

迄被参注進ノ事候て早速被帰答ニ而一度ニ出京也

一 先是肥後守殿より召ニ来ノ後、早々一社惣代兵庫頭昌幸

右衛門尉兼齊兩人奉行伝奏為御届出京也

一 五家之輩御公儀ノ様子相聞返記テ左

西ノ方屋敷諏訪肥後守殿門前ニ而乗物ヲ出ルト、其偃

大小ヲ取テ廊下ニ老人ツツ入置様ニ屏風ヲ引廻シタル中へ一人ツ

ツ入被置也、其次森連久ヲ召出、違勅命ヲ稚意ヲ

專ニ致候ニ付、去年より閉門ノ処、此度遠島ヲ被仰付由、

次鳥居大路佐平、同前仰ニ而位被召放遠島、次梅辻郡久

是モ同前之仰渡ニ而同位モ被召放遠島、其外尽ク

位ヲ被召放追放被仰渡ト云

一 惣代太頭、清親兩人ハ直ニ右ノ由ヲ御奉行伝奏被届而

被帰也

一 未半刻、公儀与六頭同心十二人被来、与力入江安右衛門

鶴飼治五右衛門、同心源山弥五衛門、七家惣介、村山富右衛門

田中清八以上六人、森連久同倫久方へ

与力村上利右衛門、同心近藤只右衛門、佐伯弥平次

右三人ハ富野致久方へ

与力砂川金右衛門、同心高屋七郎左衛門、太田儀兵衛

右三人ハ松下常久方へ

与力加納武介、同心大嶋甚三郎、寺田処平

右三人ハ梅辻郡久方へ

与力真野孫之丞、同心小尾善介、中村新介

右三人ハ鳥居大路佐平方へ

出向之人々十樂寺ノ門ニ出向而、夫々ニ受取ノ所へ為案内

東辻大和保万、予兩人ハ鳥居大路家へ為案内、席より

大炊助季門、縫殿助保言、是又御馬ノ橋迄被出向以上

四人為案内、先大工ヲ二人召寄、右屋敷指図ヲ申付

夫より家財ヲ一々帳面ニ被記

一 平箆筒 一 書物少々入

一 小箆筒 一 字リ

一 箆筒 八 内書物入式ツツハ明箱

一 封付長櫃 反古入

一 朱傘 一本 鞠求子弓 ○物少々有之

其外雜具一切無之尽ク封ヲ被付

一 系図箱入

一 小官 弑ツ 内讓狀 正徳三年 貴布禰ノ社造替之節
宣旨五返、宣命一返、黄紙 其外下知狀之類少々

有之、右三箱ハ事終而後、評議所へ持參被致也

丑刻斗、尽ク相濟、評議所へ被參也、鳥居大路

家ノ仕舞一番ニ相濟也、其已後、梅辻、森、富野

松下へ見舞、又鳥居大路へ帰、日出之時分、先帰宅

抑 五家之輩違勅命濫觴ハ、闕職之節、代官

役勤方之事、先年より度々互ニ申分有之処、享保

元年九月正祝林三位重豊死去ノ後、祝職ヲ林家より

譜代職ト申上、五家よりハ転任職ト申上間、祝職闕ニ付

代官勤方ノ事ヲ一社伝奏日野大納言輝光卿より

御尋ニ付、闕職ノ所ヲ勤合ノ儀ヲ宝永元年十二月一社ノ

伝奏飛鳥井中納言雅豊卿時御吟味ノ上ニ而氏人申分

可相立処ヲ俄ニ相變、操上転昇ニ被仰付、迷惑至極仕候

之事等ヲ申上ニ付、勅任之職ヲ為私操上転昇無用ノ由

輝光卿より被仰渡、既臨時ノ祭ノ時より正祝ノ所ヲ権祝勤

権祝ノ所ヲ代官役可勤由被仰付所、五家之輩氏人ト立

交りて内陳之儀ヲ勤申事難致由ヲ申、一人も不殘、神事ニ

不參ス、因慈其由ヲ申上ル処、明曆ノ任例正禰宜以下尽ク

代官役ノ氏人可勤不足ノ所ハ、社司ノ子弟可勤由被仰付

臨期各參勤ス、神主ハ岡本三保喬也、此時先違

勅命、其後小祭〇七家ノ子弟ノ中、為嫡男其闕ヲ可

勤由ニ又被仰付、享保二年ノ正月申中モ尽ク為嫡男勤也

其後林重統申分不立、祝職ヲ転任ニ被仰付、次第ニ

転補シ、(享保二年四月也) 貴布禰祝へ岡本保棟新補、其後ハ闕職

雖無之、氏人中より不絶願ヲ申上、内享保四年十一月岡本三位保

喬死去ノ後、氏人より弥願ヲ申上、林家より又祝職ノ儀ヲ願ヲ

申上、此間享保三年春松下常久男旧冬十二日位階ヲ申上

爵 勅許成ニ付、元服ノ義ヲ勤着衣冠參社ス

因茲右願ノ内ニ着袍ノ義且氏人爵廿年未滿ノ事ヲモ

願上置也、然ル処享保四年十二月十二日 坊城弁殿より御召

状来如左

止ノ無連參可有沙汰候也

被仰渡儀之間、一惣代并新宮以下社司氏惣代等

明日十三日辰刻無連と可被參入之旨可令沙汰社中之由

権右中弁殿所〇也 恐惶謹言

十二月十二日 源尾左近持〇

直高

正禰宜殿

翌十三日、一社惣代、梅辻備後守郡久、山本内膳正亮頭、新宮

以下社司氏人、若宮禰宜、村雲豊後守保臣、中大路

主計助季賢、坊城弁殿へ被參、夫より伝奏万里小路中納言

尚房卿へ被參、夫より武家伝奏中院大納言通躬卿ノ許へ

被參、伝奏中院大納言通躬卿、一社ノ伝奏奉行

御列座ニ而被仰渡義ヲ被仰渡、尚以書付其由ヲ被仰

渡其記ニ左

一 五官闕職之時自七家社司片岡

社職可勤勤之片岡以下社職闕

之節者於社中弥代官役來候

五人之氏人之内可相勤事

五官闕職之時、片岡貴布禰禰宜祝等

自然於有故障所勞者右代官役

五人之氏人之内可相勤先之神主

并四官闕之節氏人代官勤仕之

例有之上者雖為五官之内代官

役之氏人可相勤事

右本紙大奉書真写

別紙 着袍事

雖為七家社司嫡男非職

輩者叙爵元服之日着位袍

可令社參自翌日着袍可為

停止氏人輩同叙爵元服

之日着位袍令社參自翌日着

袍可為停止

但元服之日於無位者尤可着淨衣也

除爵事

七家社司嫡男住近例自九歲

可申爵於氏人者先年自

廿歲可申旨雖有申渡自今

從十五歲可申爵

右手紙奉書行字

右之通被仰渡ノ後各退去、其後色々評議之上、

雖為中和之御沙汰、於氏人中者御受ヲ申上、於五家者

御受不申上、又違勅命也、同日森飛驒守連久

神主 勅許、富野治部大輔致久 正禰宜、勅許 正祝又

闕職也、仍而小祭之節氏人者被仰渡之通可勤卜申

五家者御受不申上者如元七家ノ嫡男可勤卜申、互ニ

窺申所、小祭神事雖及臨期不被仰付、其夜ノ夜半

斗也、又七家ノ嫡男自小祭正月神事可相勤由被

仰付、夫より後段々御願ヲ申上ル処、享保五年六月十一日

雑色五十嵐より書状来事左

上賀茂

神主 森飛驒守 正四位下 正禰宜 富野治部大輔從四位上
權禰宜 松下民部大輔 從四位下 權祝 梅辻備後守 正四位下
片岡社祝 鳥居大路左京 從四位下 貴布禰社祝 森式部 從五位下

右六人御用之義有之候間、明十二日朝五ツ過ニ安房守役所へ
可被出之旨可申遣候、右之内病氣ニ候共不參無之候様ニ
可申遣事

六月十一日公事方右之通御書付出候間

明十二日朝五ツ過ニ御出被成候様ニ可被仰渡候、尤右六人之内
御病人御座候ハバ駕籠ニ而成共御出候様ニ入御念被仰渡候
間左様ニ御心得可被成候以上

子六月十一日 五十嵐市郎兵衛

上賀茂

御役者中

右之趣ニ付、十二日山口安房守殿御役所へ六人共被出、惣代
之義ハ不申来ニ付不被出、右六人被出候後、与力六人

同心十二人、老入ノ家へ三人ツツ被参、代々口宣御朱印

記録等吟味之上ニ而尽ク評議所へ為運、屋敷絵図

或ハ垣ヲ為致被申、内六人共ニ申刻斗帰、其後
門ヲ閉青竹ヲ打而仕込次第、評議所集而、右五家ノ
隣家両向ノ衆中状ヲ為致印形ヲ取テ、夜半過ニ被帰也
六人ノ輩へ於安房守殿役所被申所、違 勅命振稚意
依之職官位或ハ官職或ハ職位被放可致閉門ノ旨
被申渡ト云々

又一社御伝奏より惣代ヲ召ニ来、被仰渡書付記ニ左
神主職官位共ニ被召放候 森飛驒守

正禰宜職并官被召放候 富野治部大輔

權禰宜職并官被召放候 松下民部大輔

權祝職并官被召放候 梅辻備後守

片岡社祝職被召放候 鳥居大路左京

貴布禰社祝職并位階被召放候 森式部

富野治部大輔養子浄久 恒久事也 始名字ヲ書来

養父同前ニ閉門

此分倅共居住ノ者ハ遠島

予此節ハ森家ニ事多メ無人候間、可詰由ニ而役人宿

木工権頭宗辰ニ詰

森家へ来ル与力同心

諏訪肥後守殿組 鵜飼澤五衛門、入江安左衛門 此二人与力

守山藤左衛門、今井平大夫

草川藤介、寺田雲平 此四人同心

雑色 勘左衛門

森家へ被詰惣代

右京亮旨頭、因幡守太頭、雅楽頭寄頭、大膳権亮清親

右四人

惣代より認而遣ス状之事如左

御印殿相添候道具之覚 此一行ハ一応書出後依好如此書出ス也

一 御印殿并全灯籠 二ツ 鎖 壹ツ

一 御棚幣絹併御蓋

一 供僧之書物 一卷

一 社務代装束

森式部願

一 社中文庫之鍵

右之通一社へ請取申度奉願候以上

上賀茂一社惣代 藤木大膳権亮

享保五庚子年六月十二日 澤田社祝 藤木因幡守

若宮祝 岡本筑後

御奉行所

右之内幣絹ハ自分之物之由ニ而不渡、其外尽受取者也

代々口宣六十通全御代々御朱印

記録箱十六斗評議へ遣ス、屋敷ノ四方尽ク堀ノ外ハ

やらい垣ヲ俄ニ被為致、翌日小野能登、藤野井佐渡

兩人共ニ松下民部亭ニ而非藏人也、遠島ヲ被申渡

夫より今日迄閉門

一 今日遠島追放ノ国之重而書付ヲ見委可記

妻子者社中へ御預ケ也 連久、佐平二人ハ隠岐国へ遠島

郡久老人ハ老岐国へ遠島也

一 御追放之所々如左

五畿内五ヶ国、近江国、丹波国、播磨国、武藏国

相模国、尾州名護屋、紀州若山、常州水戸、駿府

肥前丸山、東海道筋、木曾路、日光路以上

十六日 丁未 快晴

一 辰刻松下構所へ見舞、午後帰家

一 二条より呼ニ来、惣代因幡守太頭、内膳正亮頭兩人被出

五家ノ輩ノ從弟迄遠島可仕由ヲ被仰渡兩人被帰

後親族へ其由ヲ被申渡

一 五家ノ番ノ事、十手より一人ツツ被出、一家へ兩人ツツ替ニ被詰答

ニ於評議所若役へ被申渡也

一 當社ノ御奉行坊城弁殿御内源尾左近將曹より書状来

文言略之意趣ハ只今御用ノ義候間、神主一社惣代

可被參由申來、因茲神主林宮内権大輔重統、澤田祝藤木

兵庫昌幸、雜掌藤木大膳権亮清親三人被來、被仰渡義風聞ノ

通り月十七日中ニ社司ニ可成仁鉢ヲ書付可致持參由被

仰渡下云々

一未刻又松下構所へ見舞、申刻帰家

一未刻過、森富野梅辻鳥居大路ノ与力同心ハ被帰也

松下者事多故、残テ被居也

一松下民部弟小野能登、藤野井佐渡、非藏人被召放也

一入夜構所松下へ又見舞、夜半過帰家

十七日 戌申 自昨夜小雨下 自己刻晴

一飯後、向兵部少輔亭、只今松下家相濟候而、三人共ニ

被帰由被申、此間吟味之内、後鳥羽院ノ尊影其外

家ニ伝タル書物不見ニ付、其由ヲ尋、弥不出、民部母豊後

散法門院ニ伺○彼方ニ預け置タル由ヲ彼官共申ニ付

其通之状ヲ致サセテ被帰由也、又昨日伝奏被參候

趣ヲ尋、保輔云五家ノ職ニ可成仁鉢ヲ書付可出

由ト云々

一氏足方へ人ヲ遣ス、先日ノ御礼延引ノ断也、尾崎○馬へモ書状ヲ

遣ス、同断、返答無別義

一相役善顯より此間騒動ニ付為見舞書状來、返答近而可遣

一松下家与力同心被帰、已後為御届惣代二条へ被出

一昨日御伝奏より被仰渡為○処、惣代御伝奏へ被出

一御伝奏より惣代召ニ付來、即刻被出處、昨日被仰

渡候趣ハ於社家中撰器量、五家相統ノ仁鉢ヲ

書付可出由被仰渡候処ニ被仰渡候得共、左様ニ而無之

旧冬書出候五家ノ本流十六流ノ内早分ル古キ家ノ

者共ノ内ニ而、非病身、器量ノ者ヲ書付早々持參可

仕被仰渡下云々(注 去年十月廿日過三十六流ノ内ニ而古キ家ノ者

ヲ書付可出由被仰渡而、第一予第二兼齋第三元宗、右參人ヲ書付一

社より指出置也)

一子ノ刻過評議所より呼ニ來、即刻向評議所、右衛門尉

兼齋、左衛門尉盛平、大炊允督久、春大夫篤久、予

相揃ノ後、席中へ尽ク被招、此席五家相統之儀

ニ付、右ノ人々ヲ一社より被為吹挙各同心ニ候て書付ヲ

指上可申於其義者置文ヲ認被置候間、此状同心ニ

候ハバ弥可有吹挙由ニ而置文ヲ被統其意自今以後

守正直雅意ヲ挟申さぬ様ノ状也、各尤ノ事と同心ス

右状者重而可記者也

十八日 己酉 晴夕陽曇陰

一氏足方へ人ヲ遣ス、昨日之書状ニ了簡間違有之ニ付、其義ヲ

申遣ス、文言略之返答来、同略之

一昨日五家相統ノ仁躰、旧冬書付ノ内ニ而其仁ヲ撰

早々書付可持参ノ由被仰渡候段、林重統一同ニ

御請ヲ申上候已後五家相統之事ヲ弟二人二男

此三人願申度由ヲ被申、難然御伝奏より被仰候

趣ニ致相違候間、一社一同ニ吹挙ノ事叶間敷由ヲ

被申ニ付、左様ニ候ハバ尚一分御願可申上由ヲ被申候而

其已後願書為一分伝奏被出ト云々、村雲豊後守

保臣、大蔵大輔保記此兩人惣代

一佐兵衛大尉長氏（両度）和泉守依季、勝之丞命顯（両度）、喜八、

氏曹、修理伊氏、式部権少輔季国、右之衆中為悦入来

一氏高入来、昨夜之義物語ス、及暮帰京

一惣代保臣保記申下刻被帰、一社より出五人ノ書付首尾

能置被帰也、重統モ伝奏へ被出ト云々

一奉行所へ惣代兩人被出、野中ノ芝ノ出入也、近日公儀より

可有檢分由被仰渡ト云々

一酉刻斗、又御伝奏より惣代召ニ来、并ニ神主重統

口書ヲ可致持参由申来ト云々

一戌刻斗、惣代被帰、被仰渡品十六流ノ内経代古キ

家ノ者今何人斗可書出由被仰渡ト云々

重統首尾不聞

一亥刻斗、立合有之、右之人々ヲ被撰ト云々

此人々重而可記此書付当日ノ末ニ記シ持参ハ明日也

一戌刻斗、向久尾亭、篤久ト小時対談シ帰

一氏足入来、亥刻退出

一入夜宋女正明氏、勝之進、命顯、喜八、氏曹、右京権大夫清茂

入来

十九日 庚戌 曇陰

一相役善顯より書状来

一今日昨日被仰付候家吟味ノ上ニ而書付、御伝奏へ

持参也、人数ハ重而可記此書付、當月ノ最末ニ記置者也

一朋氏、意俊、氏曹、伊氏入来

一公儀より惣代ヲ呼来ノ後、早々被出、後鳥羽院ノ尊影ヲ

被渡

廿日 辛亥 曇陰

一規保入来、只今自二条より与力同心衆被参由ヲ被申

一仍未刻斗、向構所、砂川金右衛門外二人、以上三人被参

其用後鳥羽院御宸筆西蓮文、後鳥羽院四百年

御法示ノ和歌其外家ニ相伝ル書物、先日無之故為

吟味也、仍而去年六月岡本家ニ被預置候長櫃ヲ

評議所へ取寄吟味ノ由也、然共不見ト云々

酉ノ刻各被帰也、鳥居大路家ニ無用事ニ付、未半刻帰ル

一予 他行ノ間朋氏御出ト云々

一清連入来、右檢使被参由ヲ

一禁裏ニ御寄合有之ト云々

一亥刻斗立合有之

一惣代兩人御奉行へ被出、夫より御伝奏へ被詰也

廿一日 壬子 自昨夜雨下已刻止後曇陰

一飯後、向保補亭、昨夜之様子ヲ尋、保補答云、昨日

御伝奏へ被出事、此間被仰渡候十六流ノ内歴代

古キ家ノ書付ヲ一昨日御伝奏御奉行へ可致持参ト

存、二通認持参ノ処、二通共ニ御伝奏へ被置候ニ付

今一通認御奉行へ持参、且一昨日御伝奏へ被参

節、五家ノ次第書付可致持参由被仰付持参処

尚房卿少々御腫物氣也、今日御寄合ノ席へ所司代

松平伊賀守殿御出ニ付少々内御保養被推候、大方

今日可致仰渡候間、惣代ニ先帰而未刻斗ニ可参哉

又ハ中宿ニ相待哉ノ義被仰出ニ付、先左様ニ候ハハ中

宿迄可退出仕由ヲ申上、中御靈邊ノ中宿迄退出

亥刻斗今夜被仰付無之由被仰渡而、夜半斗

立合ノ席へ惣代兩人被帰ト云々、尚今日又被詰由也

五家次第ノ書付ハ重而可記、後日頭ニ記之者也

一命頭入来、昨夜半頃武家御兩伝御参院ニ而院ノ

御伝奏へ少時人ヲ払御相談事有之而御退出ト云々

命頭昨日御番衆也

又云昨夜ノ御大寄合ハ可及今朝由承ト云々

一氏高入来、見舞也

一氏足より書状朝来、此間ノ様子可承由也、返答相応

母公よりも御状被進、予方より一所ニ申入

一昨夜惣代被帰節御尋ノ義も可有之間、明日御伝

奏へ可相詰由被仰渡、仍而今朝より御伝奏へ被詰

一京都御所司松平伊賀守殿明日関東へ御発足ニ付、惣代

兩人被出、其儀ハ葵祭ノ節神馬并競馬御馬ノ

事ト云々

一清茂入来、今度五家相統ノ人数ニ加リ申由内証

開候ニ付被為知也

一季蔭入来、同断

一氏諄入夜而入来、篤久より廻状持参記左

山本左衛門

盛平

梅辻勘ケ由

督久

西池内膳

篤久

安曇川内記 氏凭

岡本主膳 季隆

右五人急御用之義御座候間、万里小路様へ早々御出可有之候

太顯

清親

惣代御伝奏〇〇在如此申来候間、只今早々御出

可被成候、別紙次へ早々御廻し可有之、又尤先會所御出可被成候以上

廿一日 会所 氏備

右廻状次主膳へ遣ス

一各評議所集ノ後、御伝奏へ可参由被申渡、夫より直ニ

万里小路殿へ参、其已後坊城弁殿御出御列座ニ而御伝奏被仰

此度五家ノ者共武家ニ被仰付被所重科ニ付、相続ノ者

書付御吟味之上、言上之処、鳥居大路家齋盛平兩人

ニ付督久へ被仰付、森ハ久尾病氣ニ付篤久へ被仰付、

梅辻富野ハ新家ニ而庶流無之ニ付梅辻家ヲ氏凭、富

野家ヲ季隆ニ被仰付ト云々、則書付一紙被下記テ左

鳥居大路家 山本左衛門 正五位下 盛平 五十一歳

松下家 梅辻勘ケ由 從五位上 督久 五十歳

森家 西池内膳 從五位下 篤久 三十四歳

梅辻家 安曇川内記 從四位下 氏凭 四十二歳

富野家 岡本主膳 從五位上 季隆 四十三歳

右被仰渡ノ後、御玄関へ退ク、以取次被仰出者此度相続五人之内嫡男ヲ書付可上由ヲ被仰付、於御

玄関ニ認記テ左

梅辻勘ケ由男 重次郎大夫 朋久 十一歳

岡本主膳男 梅松大夫 延季 廿一歳

右之通書上御受取被遊由申出後、明日惣代兩人并神主相加里御受ヲ可申上由被仰出、後各退出、直ニ

坊城弁殿へ右為御届、惣代并五人ノ輩一所ニ参、未御留守之内申置也

一子刻各帰郷、盛平、督久、予同道ニ而盛平亭へ寄、一献ヲ

被勅之後、向評議所、立合之席へ被招、一同ニ祝儀ヲ被

述、且明日公武へ御礼可勤由被申渡ノ後、各帰家

此席高倉殿へ参、氏高留守故、季寿ニ今夜ノ被仰渡ヲ申置

一命顯、氏高、意俊、清茂、季蔭、氏曾、氏諱、伊氏

清連、久尾、保輔等入来

一御召之廻状来後、弘篤、直方入来、此度五家相続ノ

義被仰出候ハバ、五家ノ記録書物等其外松下ノ備前ノ

御祈禱料ハ衆中へ被納候義ヲ被申而退出

臨期ケ様ノ事何共難得其意事也

廿二日 葵丑 快晴

一 辰刻向季隆亭、盛平、督久、篤久、予揃次第、吸物

一 献被ススメ後、各同道シ出ル、清茂、保富、彼亭へ被見込也

一 巳刻、室町中宿（檜物屋大より真来）各参集、惣代因幡守

太顯、大膳権亮清親被相伝、太顯清親先達而神主

重統三人同道ニ而昨夜被仰付候御受ヲ被申上

神主ハ帰郷、太顯清親ハ残而御礼之惣代ヲ被勤故也

重統帰郷ノ節於途中参逢也

一 御礼勤ル所々次第不同順路ニ而

近衛右府殿、中院大納言殿、武家伝奏 中山大納言殿、日野

二条左府殿、同内府殿、御一所 鷹司前関白殿、九条関白殿

武家方 京都御所司 松平伊賀守殿御屋敷今朝関東

御発足ニ付御留守也、諏訪肥後守殿、山口安房守殿、

替河野勘右衛門殿未関東ニ御座候へ共御屋敷へ参

肥後守殿勘右衛門殿は京都寺社并町奉行兼帯也

右二条方角御礼仕舞次第、又二条ノ中宿寄テ

昼食等用而各帰家、堂上方ヲ仕廻ノ後、武家方ノ御礼ニ出ル也

先二条ノ中宿へ寄ル

一 此間悦見舞音物贈答之事ハ別ニ記之故略ス、各別之

子細ハ又記置品モ有之

一 惣而此間殊外取込日次モ委ク雜記

一 今日神酒献進ス

廿三日 甲寅 快晴

一 評議所より可参由申来、即刻向評議所、篤久同道也

盛平、督久、篤久、予、季隆等集次第、立合ノ席へ

被招、権禰宜より貴布禰禰宜迄各次第可進由被申渡

則小折紙ノ案ヲ求、執筆保堅、盛平亭ニ而右小折紙

ヲ五人共ニ各々ニ一所ニ認、案文別ニ記之○去記テ左

包紙ニ

申片岡社祝

四十二歳

従四位下賀茂氏凭

賀茂氏凭

此所裏小シ折返ス也

保堅ノ草案ニ云

坊城殿ニ而被仰渡候認様ト云々

職進様ノ次第 権禰宜ヲ盛平申、権祝ヲ督久申

片岡社禰宜ヲ篤久申、片岡社祝ヲ氏凭申、貴布禰社禰宜ヲ季隆申

右認ニ五人同道ニ而評議所へ持参ス

一 今日立合之ノ席、貴布禰詰番ノ事ヲ可〇〇由ヲ席へ相談之所、此已後御用等多可有御座候間、詰番義御用余之由被申渡後ニ聞、替ニ氏桂被詰答ニ決ス

一 入夜評議所へ可参由申来、即刻向評議所、席へ被招

當年葵献上使ノ事ヲ被申、盛平ハ先達而一分ニ断相立

由ニ而、督久へ被申、督久モ断、其次篤久へ被申、是又

断、其次 予断雖申かたく先、其次季隆へ被申、其上ニ而

五人ノ内ニ而尚可吟味由故、席ヲ立而盛平亭ニ集、右之

仁ヲ兼頼処、席ノ中ニ新補ノ中ニ而被下間敷義ニあれ

〇 〇との評有之間、其會尺等難計仁躰難定故其義ヲ

席入魂ノ様ニ申入候得共、とくニ其義ニモ不決メ及源更

〇 ニ各退散、子刻帰家

廿四日 乙卯 晴

一 早朝季隆入来、葵使ノ事、季隆可参向間、此由

督久へ申、督久、予兩人同道ニ而、會所備前守氏備へ其由

ヲ申入、昨夜立合ノ返答ニモ明日五ツ迄ニ返答可申入由

申来ニ付、只今申込也

一 木船詰番善顯へ書状遣ス、詰番所ノ鎖鍵モ伊氏

日参伝語ス

一 巳刻参社同刻下向

一 参社留守ノ間、氏曾より書状添、氏曾母儀より布袍壹領

夏ノ袷袴冬ノ裾半轆一足被下也、氏曾母儀ハ

予叔母也、外戚

一 未刻、奉行所より与力五頭被参、松下家後鳥羽院尊影

相添、御宸翰其外書物等吟味ノ五家不殘吟味也、

然共不出、予鳥居大路家へ出向、其節不参故、松下

家へ見通、此所へモ不見、内ニ有用事帰家、後悉吟味

被参ト云々、戌刻被帰也

一 向篤久同道ニ而向季隆亭、督久モ入来ニ而暮方迄惣

料理等ノ事ヲ相談ス

一 入夜向篤久亭、小時対談ノ内、氏諄モ入来也、先是拜

習礼ニ付、清茂へ之手紙ヲ認置帰家

一 戌刻過、氏基入来、唯今惣代帰郷ノ処、転補、新補

勅許ノ由ヲ被告

一 同刻評議所より可参由申来、篤久同道ニ而向評議

所、五人揃ノ後、會所氏備より被申渡趣、今日転補新補

勅許候間、明日御礼ニ可出由也、官物等ノ事モ亦被

申渡、勅許之次第記テ左

貴布禰禰宜 保懐 正禰宜ニ転

同祝 重治 正祝ニ転

盛平 権禰宜ニ補 督久 権祝ニ補

篤久 片岡禰宜ニ補 氏凭 片岡祝ニ補

季隆 貴布禰禰宜ニ補 貴布禰祝ハ先闕職也

一今日御祭参向料三石五斗ノ内、三石被渡

廿五日 丙辰 快晴

一御伝奏衆為年頭使今朝閑東御発駕也

一清茂へ今日ノ習礼延引ノ儀ヲ以手紙申遣ス

一辰刻、篤久同道ニ而向盛平亭、門ヲ被出時分ニ参逢而

何モ同道ニ而室町ノ中宿ニ寄合、重治、保懐、相揃ノ後

惣代、重統、清親より案内有テ後、坊城弁殿へ参、夫より

九条関白殿へ万里小路中納言殿、鷹司前関白殿、二条左府殿

同内府殿、御一所中院大納言殿、中山大納言殿、近衛右府殿

為御礼参上、夫より又五人ハ一所ニ同道ニ而各別ニ御伝奏

万里小路中納言殿、御奉行坊城弁殿へ此度相統殊

本職 勅許之御礼ヲ申上也、午刻悉ク相済、予ハ園

中納言殿奥方へ御見舞申、夫より滋野井大納言殿へ見舞

何も申置、夫より高倉殿へ参ル、三位殿御対面ニ而御悦被遊

而口祝等被下、拝賀ノ節装束其外下具等拝借之由

申上度、何ニ而も御所持ノ分御借可被下由被仰

且慈母へも宜申由等御念比被仰也、夫より帰路永温軒殿

先日之御祝儀被下候御礼申上、帰家途中督久、篤久

同道ニ而帰家

一清茂入来、今夜奉幣ノ習礼彼ノ亭ニ而被催候由

被申也

一督久、季隆入来、小時対談ノ後被帰

一盛平入来、同断

一入夜向篤久亭、夫より向清茂亭、盛平、督久、篤久

季隆、延季等被揃ノ後習礼初ル、氏基モ入来ニ而

習礼相済ノ後、一献ヲ被催也、子刻各退散

廿六日 丁巳 自昨夜雨下至今朝晴

一本職勅許且初而参向料頂戴ニ付神酒奉献

一朝飯後、五人同道ニ而儀奏衆櫛笥大納言殿へ相統ノ

為御礼参上、先者石野中納言殿、石井宰相殿、櫛笥大納言殿

広橋大納言殿、櫛笥宰相殿、園中納言殿へ参也、何も申置也

一延季入来、明日立合之節、如例誓状有之ニ付名ヲ改哉

否ノ由ヲ被申、則盛平ハ修理大夫、督久ハ安房守、季隆ハ

備中守又ハ右京大夫ノ内ニ被改由書付被来、予ハ石見守ニ

改と定、然共篤久留守故不極間、此方留置、其已後

篤久入来ニ付右之由ヲ申也、篤久ハ但馬守ニ可改卜

被申ニ付又予加テ執筆、保堅ニ遣ス

一 明日寄合ノ触有之、行○致可出由ヲ被申

一 参向料三石五斗ノ内、残五斗ノ分上良被渡也

一 参向料包紙ニ云、三石五斗七合米ニ而渡し、但六俵

五斗九合五勺廻シ

残テ四斗四升三合内五升烏帽子一頭代ニ計

○タテ三斗九升三合新良比銀共四匁四分一毛

一 入夜篤久同道ニ而向盛平亭、対談之内、督久

入来ニ而何も対談ノ後、篤久同道ニ而帰家

廿七日 戊午 晴天

一 卯一点五人同道ニ而一条大將殿へ相続ノ為御礼参上

一 此間失念ニ付延引ノ御断申上、此度之御寄合ニ格別之

義ニ付、雖非大臣其席へ御出座ニ付御礼ヲ勤也、卯

半刻各帰郷

一 寄合触有之、 丹波守兼成

一 巳刻評議所へ出頭、先此度五家相続ニ付、先達而

被出至○文評定ノ箱ニ手へト一通ニ加名字ヲ

草字判印形押、外ニ一通五家之記録之処ニ付

一 至文出来、又是ニ印形ヲ加右ニ色ノ至文別ニ有之

一 各参集之後、席定ル、依例職座次評定老次第

座ヲ被固、如例先誓状有之執筆被読上、已後

各加草字先手水ノ事有之、會所一々持而被廻之

一 不出座ノ衆ハ重而追々ニ被加之也

一 披露事多有之、一々分明ニ不覺、評決ノ分荒増記之

一 葵使季隆、兼齋如例来朔日ニ船川之証文願ニ被出

様ニ被申渡

一 此度五家ノ番ニ一日共昼夜二人ツツ相詰候而、皆之苦勞

仕候由風聞ニ付、一人ツツ被定、七町ノ番所ニ詰ル事ヲ被止

其上ハ木ヲ少々ツツ被下筈ニ決、一町々々の荒増積リ

書ヲ百姓ノ行事より被取而、一町ノ大方ヲ積リ上一軒ニ而

六升合好ノ八木ノ一所ニ一町へ被下筈ニ決

一 先誓状より己前ニ五人之輩改名披露有之、左右衛門尉

盛平ヲ修理大夫、大炊允勘ケ由事督久ヲ安房守、

内膳篤久ヲ但馬守、内記氏凭ヲ石見守、主膳季隆ヲ

備中守ニ改ル由ノ披露也

一 去年六月十二日、五家閉門ノ夜、五家ノ記録ヲ林、岡本兩

家へ被預置也、右ノ記録ヲ一社へ預度由、両家より昨重統

保懐奉行所へ被願ニ付、明日持参可被致由ニ付其儀ヲ

被申渡也

一 月番先三月ノ仁ヲ被定、盛平、輝顯、佳清、保言也

一 諸役人關改ニ付翠簾、疊、幕等ノ奉行、予、寄顯兩人

ヲ被定、其外一々役人ヲ被定、一々不及記

一當山下刈ノ奉行、予、季郷、寄顯、可顯、壽顯、菊顯ヲ被定
壽顯、菊顯兩人ハ無足也

一評議多有之ニ付、夕飯有之、酒ニ献也、右之外評議

所書物等、此間段々御吟味ノ処不知ニ付、若小野能登

藤野佐渡方ニ可有哉と存候間、御奉行所より御吟味被

成被下間敷哉候由、此間御奉行所へ出頭之席被窺候処

右兩人ヲ宮元ニ而吟味可致由被仰渡由也、依之近日

召寄吟味可有由也、近急之内ニ候得共、此義も窺

所不苦由被申渡也、今日季隆拜賀ニ付早出

一申刻評議所退出、直季隆拜賀ニ付彼亭へ見舞

夕食ノ上酒中也、出門之前予退出、社頭へ可見舞

ため也、然間臨期ニ衣紋ノ義被頼間、先帰宅、着淨

衣指貫、再向彼亭、衣紋を着、其後献有之出門也

行列松明二人 神人取之、幣二本 刀禰一人取之、季隆

沓持、傘持、白丁二人取之、先本社次新宮ニ社ニテ

奉幣、新宮貴布禰社遙拜之心也、 取神 延季

大田社迄悉兩段再拜、次ニ御印ノ社へ被参兩段再拜

次ニ書院へ被昇、重統出被逢口祝等ノ事有之

一今朝氏尚方へ人ヲ遣ス、三位殿御装束下具等為拜借也

一自今日氏足氏尚入来、氏足ハ晚方氏尚ハ早朝より

廿八日 巳未 自昨夜雨下至今朝止 快晴

一今日予拜賀也、篤久も今日被勤也

一朝ノ間 神酒調進

一神主重統亭へ今日拜賀ニ付御印ノ拜ヲモ可致由為

案内心使申入非下部

一刀禰神人へ夕飯前触ヲ遣ス

一衣紋 高倉大納言永福殿御門弟 越前守賀茂成森

一奉幣取次家弟氏高勤之

一未刻過、出門行列記テ左

社人 松明 持幣 白丁 沓持

刀禰 予 束帶 布衣

神人 松明 二棒 白丁 傘持

本官片岡社奉幣八拜ノ奉幣也、其外撰社皆ニ

設式兩段再拜也、本宮奉幣之後、改御籍ヲ旧名ノ上ニ

紙ヲ押、奈良社より篤久同道ニ而太田并御印ノ拜ヲモ

相勤、御印ノ拜モ兩段再拜也、拜了而後書院、神主

重統口祝等有之而下向、於庭上父母拜ヲ勤ム

一氏基、清茂、長氏、督久、季蔭、氏曾、氏足、氏高等

又酒出シ吸物二三種、肴五六種炮飯等ヲ出入奥、夜半

頃各退出

夕飯触ノ衆中

宋女正明氏(家内不残) 遠江守臣顯 喜八氏曾 主膳氏足

主計允重隆 主水正清太(子息) 左兵衛清連 左兵衛大尉長氏

木工允氏倚 兵部小輔保補 勘解由規保 右京權大夫清茂

政右衛門亘恒 織部弘篤 帶刀直方 右衛門尉氏基

勝之進命顯 修理大夫盛平 安房守督久 但馬守篤久

備中守季隆 右兵衛尉季隆 主税頭氏連 宮内氏柱

三分右衛門安氏養母(安氏ハ故障也) 神主重統 宮内大輔保記

点ノ分ハ皆ワ出也

下々

片岡社ノ 刀禰老人 神人二人 小預

池ノ藤兵衛 同新九郎 同新右衛門

同助五郎 梅ノ作平衛 梅ノ与右衛門(家内不残)

池ノ孫六(家内不残)

同献立

焼物 塩小鯛 汁こまごま蒸しもの なます 大こん人じん

するめ 飯に物 くしかい ごぼう こんにやく 香物 わり

海老 吸物 はまぐり

重箱 肴 たこ 数の子 にんじん ひたし

其外鉢肴四五種

一 當月十八日己来、為悦入来之衆中又ハ音物贈授之事ハ別ニ記

廿九日 庚申 晴薄曇小雨下

一 盛平督久拜賀ニ付触有之

一時分触ノ後、向盛平亭夕飯有之、献立昨日ト大方同、

召具モ同前

一 夕飯後向督久亭、一ノ鳥居ノ邊迄見舞而帰家

一 保懐重治モ拜賀也、行列ハ不見、重治ハ布衣老人

素襖老人被連也

一 入夜篤久同道ニ而向季隆亭、今夜神事習礼ヲ

可致処、盛平督久下見ニ付空ク兩人共ニ帰家

一 氏足帰山、氏高帰京也

晦日 辛酉 快晴

一 後鳥羽院ノ御影ニ相添書物類、此間藤野井佐渡方ニ

有之ヲ召寄セ今日二条へ惣代兩人為持而揖上

一 諸方返礼ヲ勤

一 辰刻向季隆亭、季隆ハ貴布禰へ参向、盛平ハ惣代ニ

出京、督久、篤久、予招清茂今日土解ノ御神事ノ

次第ヲ習礼ス、未刻相済

一 未刻向保寅亭、片岡社ノ御鎖ノ事ヲ尋ヌ、保寅ハ去年

十月より代官ニ而片岡祝ノ闕ヲ被補ニ付相尋者也

一 申刻〇参三度ノ後、篤久同道ニ而参神事、先着衣冠

備所ニ参集、夫より土屋ニ着座、神供發遣、余者如常

片御料、禰宜方神供撤了而神主正祝忌子等於細殿

前庭有作法、残社司土屋座有之、神供直會ノ後

帰家、相統ノ後転補新補ノ七家初而神事ニ参勤

参勤之輩

神主重統 正禰宜保懐 同祝重治 権禰宜盛平

代保善 権祝督久 片岡禰宜篤久 同祝 予

貴布禰禰宜季隆 同祝関代官職直 新宮禰宜清可

同祝季根 太田禰宜保太代保万 同祝季張代季山

若宮禰宜保臣 同祝季所 奈良禰宜輝顯 同祝旨顯

澤田禰宜太顯 同祝昌幸 氏神禰宜季以 同祝季門

忌子季国女 別当兼右所司重粒 陰陽代季宝 社務代重舎

転供二番衆 片岡社転供當番状直

一 衣紋 氏曾ヲ頼

一 此間連日氏曾伊氏被見舞

當月日次事多故略スル所モ多又自然ト洩事モ

多可有之

片岡社祝從四位下賀茂氏凭

追加二月十九日出ル留

五家相統書出候輩

盛平 兼齋 久尾 篤久 督久 都久 森清 清茂

清太 清常 氏凭 元宗 季隆 保言 弘孝

右五家相統人躰之儀、五家別ノ内ニ而社役可相勤

人躰考可申上之若五家之別レ之内ニ而人躰無之候

者古キ別レ之内相考書付可差上旨被仰渡一社

一同奉畏則遂吟味書付差上申候以上

巳 藤木太膳権亮清親

二月十九日 藤木因幡守太顯

岡本宮内大輔保懐

林宮内権大輔重統

坊城弁殿

雑掌中

(後記 虫喰いのため判読不可能の文字は○で示した。また、書き写した人が前の文字に似せて書いたため意味不明となっている箇所も○で示している。原文をご所望の方にはCDで原文の画像を提供します。)